

重要文化財 長福寺本堂 保存修理事業

奈良県教育委員会 文化財保存事務所 長福寺出張所

1. 本堂保存修理事業の概要

長福寺の創建については、飛鳥時代または奈良時代と諸説があり明確ではない。現本堂については、鎌倉前期の建物と推定される。建立後幾多の修理を受けているが、最近では明治37年～38年に解体修理が行われている。今回の修理は建物背面側の柱が沈下していることから、本堂を解体し地盤の地質調査の結果を持って基礎工事を進めている。地質調査の結果から柱沈下の原因は、背面の斜面等から雨水の浸入を見て、地盤が緩んだ事によると判断された。そのため昨年度中に本堂の解体を終えて地盤調査を行い、現在はその結果に基づいて基礎工事を行っている。また今回の事業は解体工事であるため、堂内に描かれている彩色画の詳細な調査が可能になった。そのため科学的調査も含めた彩色調査も、昨年度末より行っている。

- 工事期間：平成24年9月～平成28年7月
- 事業期間：平成24年9月～平成28年10月
- 総事業費：287,500,000円

2. 今後の予定

- 26年度：建物木部の組み立て
- 27年度：屋根瓦葺工事、壁工事、素屋根解体
- 28年度：壁工事、須弥壇補修、外構工事、電気設備等工事

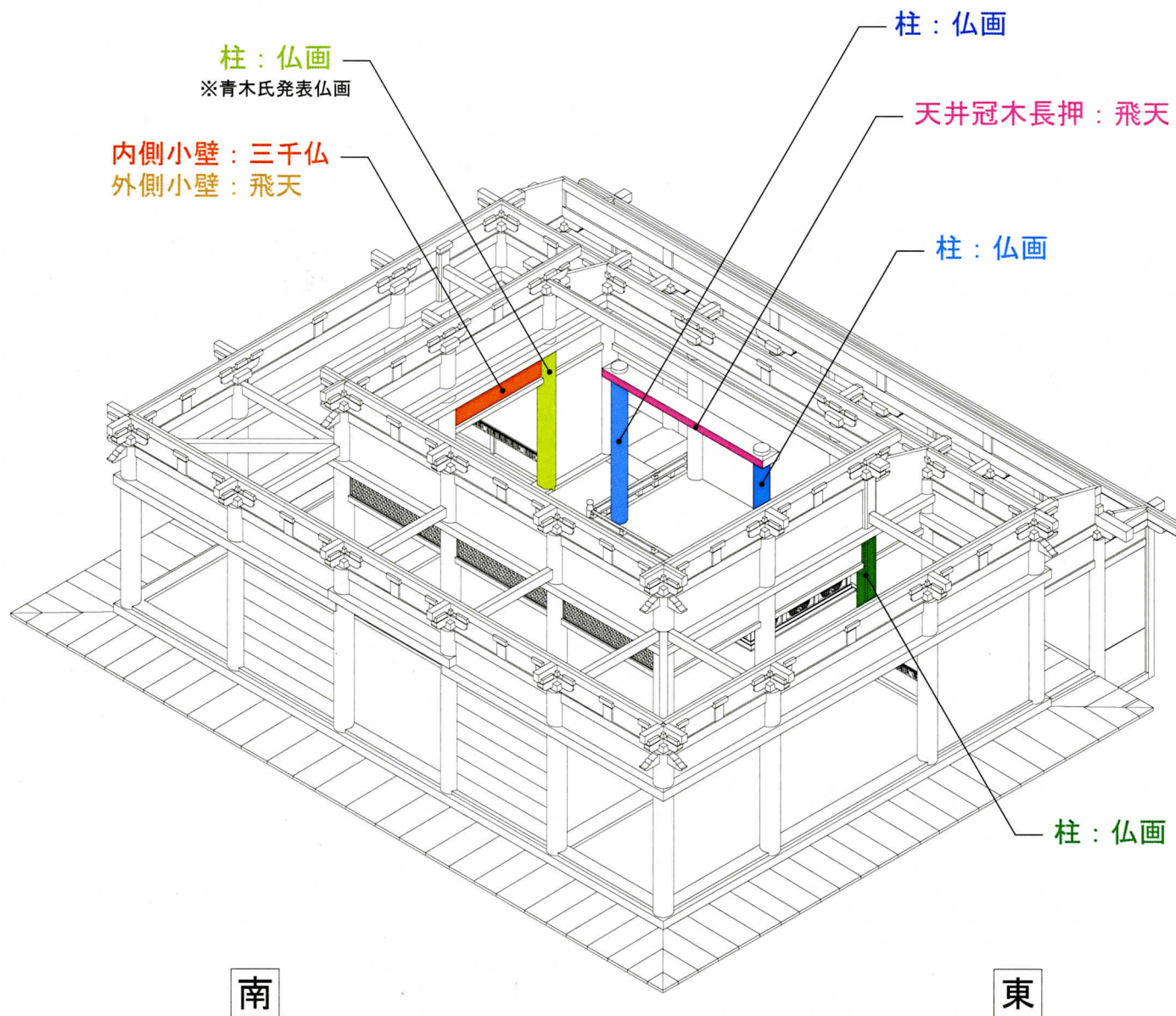
3. 長福寺本堂の概要

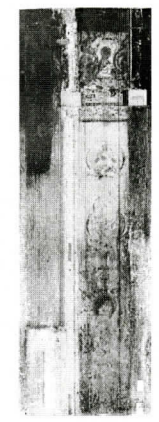






- 名称
重要文化財 長福寺本堂 1棟
桁行五間、梁間三間、一重、入母屋造、向拝一間、背面下屋付属、本瓦葺
- 建物の大きさ
平面積 95.1㎡ 軒面積 163.1㎡ 屋根面積 199.6㎡ 桁行 10.2m
梁間 11.8m 軒の出 1.7m 軒高 3.5m 棟高 7.6m

現本堂は建立年代を記す資料等が発見されていないものの、細部意匠・様式から判断して鎌倉前期頃と推定される。建立後は享徳三年(1454)、天正二年(1574)、延宝六年(1678)、宝暦十三年(1763)、明治三十七年(1904)に修理を受けていたが、今回の解体調査で解体修理は宝暦と明治の二回である事が分かった。正面の向拝についても後補の可能性も考えられたが、これについても調査の結果、当初からあった事が確認された。基壇は発掘調査により、鎌倉時代に築かれたものの江戸時代に再度上面整地を施していたようである。

4. 彩色調査の概要

本堂内部には、柱・天井・壁等に彩色が施されている。特に当初と思われる4本の柱には、仏の姿が描かれていた。しかし修理前の状態は、顔料の剥離や煤による汚れが酷く、早急に保存処置を行う必要があった。そのため昨年度の本堂解体前に剥落止め処置を行い、その後解体が進むと共に彩色画の全容が分かって来たので、科学的調査の是非を検討した。その結果、今回は特に各部材が明るい場所で動かす事が出来る状態である事から、科学的調査により貴重なデータが収集できると判断し、赤外線写真など非破壊検査・調査を行う事とした。今後可視光線だけでは分からなかった部分の彩色画の内容が確認されれば、美術史・宗教史的な方向からの価値判断も進められると期待される。



柱：仏画	柱：仏画
	
柱：仏画	柱：仏画
	
天井冠木長押：飛天	
	
内側小壁：三千仏	
	
外側小壁：飛天	
	
重要文化財長福寺本堂修理工事	

「近赤外線撮影法による長福寺本堂内陣柱迦陵頻伽図の図像調査」について

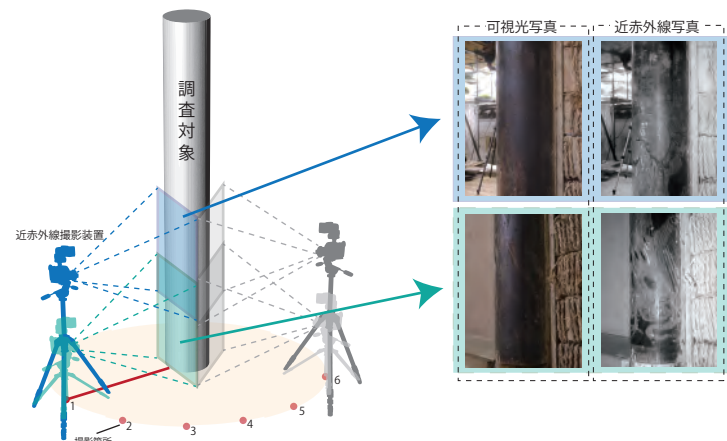
発表代表者：青木智史（奈良教育大学 特任准教授）

奈良県生駒市に位置する真言律宗・長福寺の本堂は、鎌倉時代に建立された建物（重要文化財）であり、平成 24 年から解体修理が行われています。創建についてはいくつかの説があり判然としませんが、寺伝によれば 13 世紀中ごろに叡尊の影響のもとで実詮らによって再興が図られ現在の本堂が成立したとされています。従来から、本堂内の柱や長押などには鮮やかな彩色が施されていることが知られていましたが、現在は経年劣化による著しい退色や剥落が生じており、その全容は明らかではありません。しかしながら、平成 25 年 11 月以降に継続実施してきた近赤外線撮影法による光学調査において、肉眼では退色等により不明瞭な図像も、近赤外線撮影では詳細に確認できることが明らかとなりました。

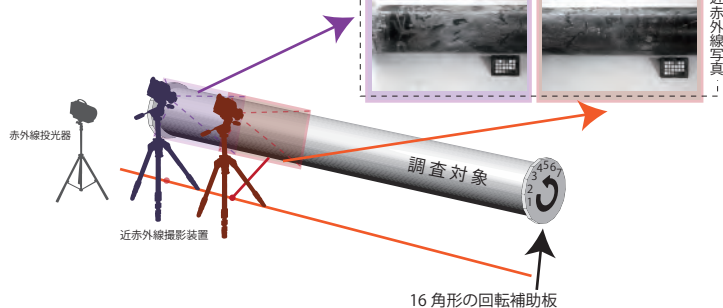
調査には近赤外線撮影装置 PENTAX 645D IR を使用しています。調査では同一アングルから可視光撮影および近赤外線撮影を実施し、その都度光学フィルタを換装して撮影を実施しました。

調査は平成 25 年 12 月と平成 26 年 2 月の 2 回実施し、前者は解体前の柱が立った状態で撮影調査（以下、撮影調査 A）を行い、後者では解体後の柱を寝かせた状態で撮影調査（以下、撮影調査 B）を行いました。撮影調査 A では、迦陵頻伽図が描かれた部分のみを撮影範囲とし、図像の上部と下部を一定距離で 6 方向から撮影し（可視光画像、赤外線画像ともにそれぞれ 12 枚の画像を撮影）、コンピュータ上で結合し展開画像としています。撮影調査 B では、取り外した柱の上面と下面に 16 角形の回転板を張り付け、柱を転がしながら柱全体の撮影を実施しました。本研究で報告するのは、その内の迦陵頻伽図が描かれた範囲を一定距離から 7 方向上下 2 分割して撮影を行った内容です（可視光画像、赤外線画像ともにそれぞれ 14 枚の画像を撮影）。撮影調査 A と同様にコンピュータ上で結合し展開画像としています。

撮影調査 A 法



撮影調査 B 法



コンピュータ上で画像を統合

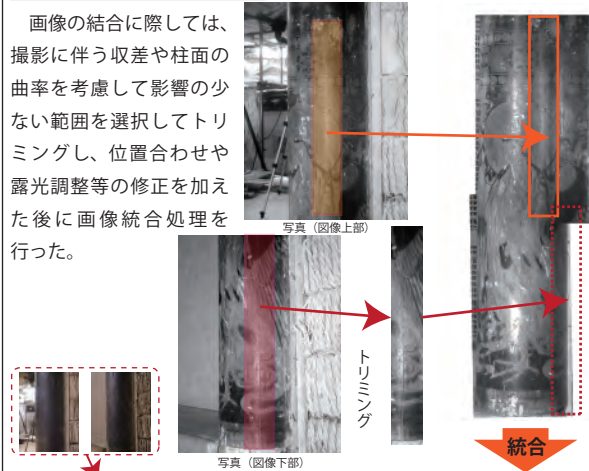


図. 可視光画像展開図 (撮影調査 A)

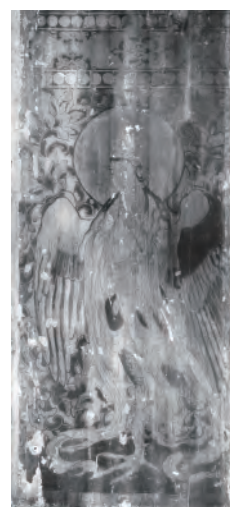


図. 近赤外線画像展開図 (撮影調査 A)

調査の結果、肉眼では不明瞭であった迦陵頻伽図の全体像を明らかにすることができました。例えば、縦笛を奏で片足を地につけもう一方を屈曲する姿や流麗な衣の表現、図像右側の羽や唐草文の表現などは、本調査成果によって新たに明らかとなった内容です。鎌倉時代（13世紀後半）の迦陵頻伽図像研究に新しい資料を提出することが可能となり、本研究の大きな成果となりました。この成果は、近赤外線撮影法の彩色図像調査における有効性を改めて示すものとなったといえるでしょう。さらに、本調査では高精細な展開画像を得ることができたため微細な墨線一本一本の表現を読み取ることも可能であり、高密度で実寸印刷することにより上げ写し等に利用することもできます。柱のような平面ではない対象に描かれた彩色図像についても、本研究で行ったような複数画像から展開図を作成する手法を用いることで現状模写などの文化財記録保存分野への貢献も可能であることが示されました。撮影調査Aおよび撮影調査Bはいずれ実効的な成果が得られており、今後は調査現場の状況に合わせて用いることで実効的な調査法となると考えられます。



図・迦陵頻伽図の可視光展開画像（撮影調査B）



図・迦陵頻伽図の近赤外線展開画像（撮影調査B）